次期学習指導要領 教科別まとめ　高校 No.07

審議まとめ（2026年10月5日）を高校の先生向けにまとめ直しました

家庭

次期学習指導要領で、どう変わる？

領域を5つに再編し、中学校では独立した教科に





10秒でいうと　ホームプロジェクト等を各領域の「生活の課題と実践」に。家庭総合に新F領域を追加

やさしく言うと

高校家庭科も、領域を5つ（家庭総合は6つ）に再編する方向です。ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動は、各領域の中の「生活の課題と実践」（仮称）に位置付け直す方向です。家庭総合には、新しいF領域「総合生活実践」（仮称）を設ける案です。家庭基礎と家庭総合の役割の違いもはっきりさせる方向です。家庭総合の履修年次も柔軟にする方向です。

高校はいつから？

全面実施	2032年度の入学生から（学年ごとに。2034年度に全学年）（見込み）
移行期間	2029～2031年度
告示	2027年度末の予定
教科書	2032年度から学年ごとに新しい教科書（2030年度から検定）

この冊子の中身

1 家庭のポイント　4つ
2 主な変更点　9項目
3 現行と次期の比較（新旧対照）　5項目
4 高校の科目と単位
5 授業時数
6 生成AI・ICTとの付き合い方　3項目
7 今からできる準備チェックリスト　7項目
8 次期を先取りする授業アイデア　1本
9 現行の学習指導要領・解説（高校）

無料 原田英語.com 次期学習指導要領ナビ

研修・会議・授業・保護者会での印刷・コピー・配布・投影はご自由にどうぞ。ご連絡は不要です。クレジットは残してください。
審議まとめ（2026年10月5日）準拠・出典ページつき。告示前の方向性で、今後変わることがあります。2026年11月4日 版

サイトで見る

家庭の3行要約（全校種）

1. 中学校の技術・家庭科は「情報・技術科」と「家庭科」に分ける方向で、家庭科は独立した教科として新しい目標が検討されます。
2. 小・中・高を通して、領域が「家族・家庭と生涯発達」「生活の経営と消費生活」「食生活」「衣生活」「住生活」（いずれも仮称）の5つに再編する案で、一部の内容は学校段階をまたいで移す方向です。
3. 高校では、ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動が各領域の中の「生活の課題と実践」（仮称）とし、「家庭総合」には領域を貫く「総合生活実践」（仮称）を加える案です。

※5領域の名称、「生活の課題と実践」、家庭総合のF領域「総合生活実践」は仮称。

1 家庭のポイント

4つ

1 ホームプロジェクトは「生活の課題と実践」に

ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動は、形だけになっているとの声もあるとされました。そこで、独立した領域ではなく、各領域の中に「生活の課題と実践」（仮称）として置く方向です。名前は「個人探究」「協働探究」（いずれも仮称）とし、家庭基礎・家庭総合の両方で行います。P224 P228

授業では、たとえば 食生活の学習のあとに、各自が家庭の朝食の課題を選んで改善を試す「個人探究」を組み込む、といった計画が考えられます。

2 家庭総合に新しいF領域「総合生活実践」

家庭総合には、新しいF領域「総合生活実践」（仮称）を設ける案です。「福祉」「子育て」「防災」「生活文化」「環境」など、5つの領域を貫くテーマの方向性を設定します。ホームルームでテーマを決め、生徒が自ら課題を考えて問題解決的な学習を行う方向です。P227 P232

授業では、たとえば 「防災」をテーマに、非常食の調理や家具の固定などを領域をまたいで調べ、地域に提案する学習が考えられます。

3 家庭基礎と家庭総合の役割を分ける

家庭基礎は、自分の生活を営み、家庭や地域の生活を支える力を育てる科目と整理されています。
家庭総合は、それに加えて生活を多面的にとらえ、地域の生活を向上させる力を育てる科目です。
食生活では、家庭基礎は調理実習、家庭総合は調理実験を通した科学的な理解で整理する方向です。
P227 P231

授業では、たとえば 家庭総合で、加熱時間を変えて野菜の色や食感を比べる調理実験を行い、理由を科学的に説明する授業が考えられます。

4 履修の柔軟化とデジタルの活用

家庭総合を複数の年次に分けて履修させる場合に「連続する2か年」とする今の規定は、柔軟な教育課程の妨げになるとして見直す方向です。住生活では、家庭総合で3Dを使って住まいを計画する内容とします。調理や製作の様子を動画で撮って分析するなど、端末の活用例も示されています。P224 P228 P232 P233

授業では、たとえば 3Dで間取りを作り、高齢の家族も暮らしやすい住まいを計画して、段差や動線について意見を交わす、といった授業が考えられます。

2 主な変更点

9項目

1. 小 中 高 領域をA〜Eの5つに再編（「家庭総合」はFを加えて6つ）

「生活の基盤」に関する領域として「A 家族・家庭と生涯発達（仮称）」（人に関すること）と「B 生活の経営と消費生活（仮称）」（暮らしの営み方＝マネジメント）を置く案です。「生活を構成する要素」に関する領域として「C 食生活（仮称）」「D 衣生活（仮称）」「E 住生活（仮称）」を置き、食育の重要性も踏まえて「食・衣・住」の順に並べる案です。生涯の生活設計と消費生活はB領域で関連付けて扱い、消費者教育や金融経済教育もBに明示する方向です。P225 P230 P231

2. 小 中 高 内容の移管・統合：住まいの働きや家庭内事故は高校へ、金銭管理は中学校へ

小学校の「住まいの主な働き」と中学校の「家庭内事故の防ぎ方など」は、最も効果的に理解できる高校へ移す方向です。中学校の「金銭の管理と購入」と「消費者の権利と責任」は新しいB領域でまとめ、消費と環境を一体的に学ぶ方向です。高校「家庭総合」にあった「生活の営みに必要な金銭」と「生活時間などの生活資源」は、中学校のB領域「家庭生活と生活資源のマネジメント」に移す方向です。中学校の住生活では、間取り図などで家全体の危険を見付けて対策を考え、家庭で実践する流れを丁寧に行う方向です。P226 P227 P232

3. 小 中 高 布を用いた製作・衣服の再利用の扱いを整理

小学校の「生活を豊かにするための布を用いた製作」は新しいD(2)「布を用いた製作の基礎」に、中学校の同じ項目はD(2)「生活を豊かにする布を用いた製作」に整理する案です。布を用いた製作は、小・中・高のつながりを踏まえ、知識・技能を段階的に身に付けて活用する内容とする方向です。中学校の「衣服等の再利用の方法」は、衣服のライフサイクルを意識した選択・活用の一つとして、必要に応じて製作の学習で取り入れる方向です。P226 P232

4. 高 高校：ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動が「生活の課題と実践」（仮称）に

独立した領域だった「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」は、学習が形骸化しているという声もあり、中学校と同じように各領域の中に置く形に改め、名称を「生活の課題と実践」（仮称）とする案です。中身は「個人探究（ホームプロジェクト）」（仮称）と「協働探究（学校家庭クラブ活動）」（仮称）とし、「家庭基礎」「家庭総合」のどちらでも実施する方向です。どの領域で取り組むかは年間指導計画に位置付け、生徒の興味・関心に応じて他の領域と関連させる方向です。P223 P228

5. 高 「家庭総合」に新しいF領域「総合生活実践」（仮称）

「家庭総合」だけに、地域の実情を踏まえた生活上の課題に取り組む新領域を設ける案です。教師が「福祉」「子育て」「防災」「生活文化」「環境」などのテーマの方向性を示し、ホームルームでテーマを決めたうえで、生徒が自分で課題を考える流れです。A〜Eの各領域と関連付けて問題解決的な学習を行い、ほかの生徒の実践も踏まえてテーマを5領域を貫いて考え直し、自分の考えをまとめる場面を重視する方向です。P227 P232

6. 高 「家庭基礎」と「家庭総合」の役割をはっきり分ける

今は2科目の目標や内容、教科書の記述に大きな差が見られないという課題がありました。次期では、「家庭基礎」は自分の生活を営み家庭や地域の生活を支える力を育てる科目、「家庭総合」はそれに加えて多面的に生活を捉え、家庭や地域の生活を向上させる力を育てる科目と整理する方向です。例えば食生活では、家庭基礎は調理実習を通した理解、家庭総合は調理実験を通した科学的な理解を深める例が示されています。家庭総合では、地域で他者と協働する実践、被服製作、3Dで住まいを計画する内容なども示されています。P224 P227 P231 P232

7. 高 「家庭総合」の履修年次を柔軟に

「家庭総合」を複数の年次に分けて学ぶ場合の「連続する2か年において履修させること」という規定は、柔軟な教育課程づくりを難しくしているとして見直す方向です。学習が隔年になっても困らないよう、国が指導計画づくりの留意事項を示すとされています。成年年齢の引き下げに伴う「原則として入学年次とその次の年次の2か年のうちに」という規定は、新しいB領域（生活の経営と消費生活）について明記し、「家庭基礎」の履修年次の規定も引き続き明記する方向です。 P224 P228

8. 中 高 社会の変化に合わせて充実する内容（高齢者・健康・お金・生活文化）

地域の高齢者が増えていることを踏まえ、認知機能・身体機能・言語機能の低下や状況に応じた関わり方を中学校・高校で学ぶ方向です。高校のA領域を中心に、青年期から自分の健康状態や生活習慣を整える学習を行い、社会保障や奨学金などの社会制度の活用も高校で扱います。キャッシュレス化への対応やリスク管理を踏まえた家計管理など、自立した消費者を育てる学習も発達の段階に応じて扱う方向です。生活文化の継承の観点をより重視する学習は、食生活では中学校・高校で、衣生活・住生活では高校で扱う方向です。 P225 P231 P232

9. 評価：「学びに向かう力」は「見取る姿」で個人内評価、「思・判・表」に「○」

「学びに向かう力」については、「初発の思考や行動・好奇心」「学びの主体的な調整」「対話や協働」の3要素からなる「見取る姿」を示す予定です。教師は思考・判断・表現の学習過程の中で、これらの姿が続けて発揮されているかを見取り、見取れた場合は「思・判・表」に「○」を付けて一体的に評価します。この部分は個人内評価（他者と比べない評価）として扱う方向です。 P233

3 現行と次期の比較（新旧対照）

5項目

黄色のマーカー＝次期で新しく入る・強く打ち出される言葉　~~取り消し線~~＝現行から消える・言い方が変わる言葉

項目	現行	次期（審議まとめの方向）
領域（内容）の構成	A 家族・家庭生活／B 衣食住の生活／C 消費生活・環境（高校はさらにD ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動）	A 家族・家庭と生涯発達／B 生活の経営と消費生活／C 食生活／D 衣生活／E 住生活（いずれも仮称）。「家庭総合」のみF 総合生活実践（仮称）を加えた6領域。 P230
ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動（高校）	独立した領域として位置付けられている。	各領域の中に位置付ける「生活の課題と実践」（仮称）とし、「個人探究（ホームプロジェクト）」（仮称）と「協働探究（学校家庭クラブ活動）」（仮称）を家庭基礎・家庭総合のどちらでも実施。 P224 P228
「家庭総合」の履修年次	複数年次に分けて履修する場合は原則として連続する2か年。内容のCは原則として入学年次とその次の年次の2か年のうちに取り上げる。	連続2か年の規定を見直し、隔年での実施なども可能に。2か年のうちに取り上げる規定はB領域（生活の経営と消費生活）として明記。 P224 P228
「家庭基礎」と「家庭総合」の違い	科目の目標や学習内容に明確な差異が見いだしにくく、教科書の記述にも大きな差がない。	家庭基礎＝生活を営み家庭や地域の生活を「支える」力、家庭総合＝多面的に生活を捉え家庭や地域の生活を「向上させる」力を育てる科目として趣旨を明確化。 P224 P227
住まいの働き・家庭内事故の防ぎ方	小学校B（6）ア（ア）「住まいの主な働き」、中学校B（6）ア（イ）「家庭内事故の防ぎ方など」で扱う。	高校へ移管。家庭内の事故の防ぎ方は高校の「ライフステージに応じた住生活」で重点的に学ぶ。 P227 P232

4 高校の科目と単位

科目は「家庭基礎」「家庭総合」のまま（名称変更なし）とする案。標準単位数は家庭基礎2単位→4新単位、家庭総合4単位→8新単位とする案（単位の数え方の変更による。P80・P82）。「家庭総合」のみ新たにF領域「総合生活実践」（仮称）を設け6領域とする案（P227・P230）。

5 授業時数

中学校で独立させる方向の家庭科の時数は本文に示されていない（総論では、小3以上の教科等から一律3～4%程度を減じるが現在35コマ以下の教科等からは減じず、具体の数値は今後示すとしている。P79）。高校の家庭基礎は、必履修教科ごとの合計が3新単位以下となる減単が不可のため減単不可とすべきとされた（P47）。家庭総合は「連続する2か年」の履修規定を見直す方向（P228）。

6 生成AI・ICTとの付き合い方

3項目

1. 生成AIなどの特性をふまえた情報収集・活用
集めた情報から考え、根拠を持って自分の考えを他の人に伝えるためには、生成AIなどの特性をふまえた適切で有効な情報収集・活用が求められるとされています。デジタル技術の操作そのものを目的にせず、実践的・体験的な活動を通して力を育てる観点で活用を考えます。P225

2. 家庭科のAI活用の基本的な考え方
子供が自分で考え、判断し、成果物を自分の言葉で説明し、最終的に自分で責任を持つという考えのもと、教師は問題解決的な学習を展開し、評価方法を改善することが当面の基本的な考え方とされています。P233

3. 1人1台端末を問題解決的な学習の基盤に
端末を問題解決的な学習に必要な学習基盤として位置付けるとされています。例として、調理や製作の様子を動画で撮って分析する、実践の前後を画像で比べる、3Dで住まいの間取りを計画する、が挙がっています。資料編には、AIを活用した情報の収集・整理や、AIを活用した客観的な評価の例も示されています。P233 資料編(2)P122

7 今からできる準備チェックリスト

7項目

- [ ] 今すぐ 題材の課題設定が先生主導になっていないか点検し、子供が自分の生活を見つめて問題を見いだし、課題を設定する時間を各題材に入れます。P223
- [ ] 今すぐ 調理や製作の様子を動画で撮って分析する、実践の前後を画像で比べる活動を1つの題材で試し、撮影範囲（手元だけなど）や撮ったデータの扱いのルールもあわせて決めます。P233
- [ ] 今すぐ 生成AIを使う場面を設けるときは、子供が自分で考え判断し、成果物を自分の言葉で説明し、最後は自分で責任を持つことを条件にし、その説明を評価する方法も決めておきます。P225 P233
- [ ] 告示まで 今の年間指導計画の題材を、新しい5領域（家族・家庭と生涯発達／生活の経営と消費生活／食生活／衣生活／住生活、いずれも仮称）に振り分け直し、移される内容（小学校の「住まいの主な働き」と中学校の「家庭内事故の防ぎ方など」は高校へ、高校の金銭・生活時間などの生活資源は中学校へ）を確認します。P225 P227 P230
- [ ] 先行実施まで 高校では、ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動を「個人探究」「協働探究」（いずれも仮称）として捉え直し、どの領域で取り組むかを年間指導計画に位置付ける形を試します。P228

© 原田英語.com 次期学習指導要領ナビ（https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/）｜家庭（高校）教科別まとめ｜研修・校内での印刷・配布OK（連絡不要）

- [ ] 全面実施まで 高校「家庭総合」の新しいF領域「総合生活実践」（仮称）に向け、地域の実態に合うテーマの方向性（福祉・子育て・防災・生活文化・環境など）の候補と、協力してもらえそうな地域の人や機関を洗い出しておきます。P227 P232

- [ ] 全面実施まで 「学びに向かう力」の見取る姿の3要素（初発の思考や行動・好奇心／学びの主体的な調整／対話や協働）を手掛かりに、思考・判断・表現の過程で姿を記録する方法を試し、「○」を付ける評価に備えます。P233

8 次期を先取りする授業アイデア

1本

高2（家庭総合） 1単位時間（50分）

「防災」を5つの領域で串刺し！総合生活実践の始動

家族・お金・食・衣・住の5つの視点で「防災」を見直し、一人一人が地域で実践する課題を決めます。

手順・ワークシート

ねらい

「防災」というテーマを家族・家庭、生活の経営と消費生活、食生活、衣生活、住生活の5つの視点から捉え、既習の知識を根拠にして、自分が地域や家庭で実践する課題と方法を計画する。

流れ

5分 先生が地域の資料を示し、この単元のテーマの方向性が「防災」であることを伝えます。「この地域で災害が起きたら、家庭の生活の何が困る？」と問い、思い付くことを出させます。

10分 グループで、地域と生活に引き付けた具体的なテーマ案を出し、学級で1つに決めます（例：「電気と水道が止まった1週間を家で乗り切る」）。

15分 グループで5領域マップをつくります。A（乳幼児や高齢者のケア、家族の連絡方法）、B（備蓄の予算、ふだん使いながら備える買い方、保険などの備え）、C（備蓄食の栄養と調理の工夫）、D（寒さ・暑さ・衛生に対応する衣服）、E（家具の配置、避難経路、在宅避難の住空間）に、それぞれ問いを書き出します。

12分 一人一人が、マップから自分が取り組む課題を1つ選び、個人課題計画シートに、関係する領域、根拠にする既習の科学的な知識、家庭や地域でどう実践するかを書きます。先生は課題が大きすぎないか、実践できる場があるかを助言します。

8分 数人の計画を紹介し、ルーブリックで評価の観点を共有します。実践のあとに、ほかの生徒の実践結果も踏まえてテーマを5領域を貫いて考え直し、自分の考えをまとめる時間があることを予告します。

評価

この時間は、計画シートで課題設定の妥当性と、既習の知識を根拠にしているかを形成的に見て助言します。単元の評価は、実践とその振り返り、5領域を貫いてテーマを考え直したまとめで行い、事前に共有したルーブリックで到達度を示します。自分の生活から課題を見いだす姿や、他者の実践を踏まえて考えを捉え直す姿は、見取る姿の手掛かりとして記録します。

9 現行の学習指導要領・解説（高校）

PDF **高等学校学習指導要領（平成30年告示）（本文）**
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf

PDF **高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 家庭編**
https://www.mext.go.jp/content/1407073_10_1_2.pdf

文部科学省の公式PDFです（クリックで開けます）。

ご利用について

- **研修・会議・授業・保護者会での印刷・コピー・配布・投影はご自由にどうぞ。ご連絡は不要です。**
  （校内研修・教育委員会の研修・教員養成の授業・学年会・PTAなど）
- クレジット「原田英語.com 次期学習指導要領ナビ」
  （https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/）はそのまま残してください。
  各ページの下に入っています。
- 中身は中央教育審議会 教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」（2026年10月5日）ほか文部科学省の資料をもとに、原田英語.comが要約したものです。**告示前の方向性**で、答申・告示で変わることがあります。（仮称）の名前も今後変わる可能性があります。
- 文中の P○ は審議まとめ本体（PDF）のページ、**資料編（1）～（3）**P○ は第3部 資料編（PDF）のページです（PDFのページ番号。印刷されたページ番号とは1つずれることがあります）。PDFで見ているときはクリックで原文が開きます。
- 授業アイデア・指導案は、審議まとめの方向性をふまえた原田英語.comのオリジナルの試案です。
- 最新の情報・ほかのPDFはサイトで：
  https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/download/（2026年11月4日 版）

サイトで最新版を見る